

【 第140 聖詠 第8 調 】

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、しゅよわれにききたまえ。  
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、なんぢによぶときわがいのりの  
主 爾 呼 時 我 禱

こえをいれたまえ、しゅよわれにききた給  
主 我 聽 給

まえ、ねがわくはわがいのり  
願 我 禱

はこうろのかおりのごとくなんぢが  
主 爾 香 爐 か 香 如 爾

かんばせのまえにのぼり、わがてを  
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいられん  
主 爾 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまえ。  
主 我 聽 給

誦經) しゅよ わくち まもり おき わくちびる もん ふせ たま わ ころよ こしま ことば かたが  
主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾

きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美しき 膏、我



なんぢ めぐみ おお もつ われら あわれ たま  
爾が恵の多きを以て我等を憐み給え。

⑦ ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い  
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

かみ じつけんしゃ しとら じつ むけい ひ なんぢら ひか いなづま ごと  
神の實見者たる使徒等よ、實に無形の日たるイイススは爾等を光れる電の若く、  
ぜんせかい つかわ なんぢら しんせい でんきょう こうみょう いざない やみ しりぞ むち くら  
全世界に遣して、爾等の神聖なる傳教の光明にて誘惑の暗を退け、無知の幽  
やみ ふか かこ もの てら われら こうしょう おおい あわれみ くだ かれ  
暗に深く圍まれたる者を照せり。我等にも光照と大なる憐とを降さんことを彼に  
いの たま  
祈り給え。

⑥ しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ  
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾  
まえ つつし ため  
の前に敬まん爲なり。

ものいみ てら しよとく よ しんせい くるま のぼ てん たか あが わ  
イリヤは齋に照され、諸徳に因りて神聖なる車に登りて、天の高きに擧れり。吾  
けんひ たましい かれ なら およそ あくしん そねみ あらそい はかな いつらく せい  
が謙卑の靈よ、彼に效いて、凡の悪心と、猜忌と、争闘と、儂き逸樂とを制す  
もつ ものいみ な えいえん はなはだ なやみ まめか よ  
るを以て齋と爲せ、ゲエンナの永遠なる甚しき苦惱を免れて、ハリストスに呼ばん  
ため しゅ こうえい なんぢ き  
爲なり、主よ、光榮は爾に歸す。

⑤ われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

しんせい しとら せかい ため いた ねつしん きとうしゃ せいきょう もの しゅごしゃ われら  
神聖なる使徒等、世界の爲に至りて熱心なる祈禱者、正教の者の守護者よ、我等  
なんぢいとたつと もの もと われら かみ まえ ゆうかん ちから たも われら ため  
爾最尊き者に求む、ハリストス我等の神の前に勇敢なる力を有ちて、我等の爲  
いの たま われら ものいみ よ とき やす おく いつせい さんしゃ おんちよう う  
に祈り給え、我等が齋の好き期を安らかに送りて、一性なる三者の恩寵を受けん  
ため そんえい だいでんどうし われら たましい ため いの たま  
爲なり。尊榮なる大傳道師よ、我等の靈の爲に祈り給え。

④ わ たましいしゅ ま ばんにん あさま ばんにん あさま はなはだ  
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

われふとう もの へび か きず いき ししゃ たお ふ しふく  
我不當の者は蛇に噛まれ、傷つけられて、氣息なき死者として仆されて伏す。至福なる  
せいせいしゃ なんぢ ちから きとう もつ すみやか われ おこ たま わ なんぢ すみやか き おん  
成聖者よ、爾の力ある祈禱を以て速に我を興し給え、我が爾の速に聴く恩  
ちよう さんえい ため  
寵を讚榮せん爲なり。。

③ ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ  
願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼  
そのことごと ふほう あがな  
はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

われふとう もの へび か きず いき ししゃ たお ふ しふく  
我不當の者は蛇に噛まれ、傷つけられて、氣息なき死者として仆されて伏す。至福なる

せいせいしゃ なんぢ ちから きとう もつ すみやか われ おこ たま わ なんぢ すみやか き おん  
成聖者よ、爾の力ある祈禱を以て速に我を興し給え、我が爾の速に聴く恩

ちよう さんえい ため  
寵を讚榮せん爲なり。

② ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ  
萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ、

きけつ もの わ たましい あ おもい くら ねむ み われ とら つと  
詭譎の者は我が靈が惡しき思に味まされて眠れるを見て、我を捕えんことを務めて  
や 息めず、神よ、ニコライの祈禱に由りて我を宥めて救い給え。

① けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そんな  
蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

しふく なんぢ われら しゅう ため おおい すくい あらわ なんぢ しよほく およそ きなん  
至福なるニコライよ、爾は我等衆の爲に大なる救と顯れたり、爾の諸僕を凡の危難、  
患難、誘惑、諸病、攻撃及び見えざる諸敵より救い給えばなり。

【 生神女讚詞 第4調 】

こう え い は ち ち と こ と せい しんにきす、 いまも  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつ も よ よ に、 ア ミ ン。  
何 時 世 世

い れ ら れ ざ る か み、 じん あ い に よ り て ひ と  
容 神 仁 愛 由 人

と な り、 な ん ぢ よ り わ れ ら の ご う せ い を  
爲 爾 我 等 合 成

う け て こ れ を しん せい せ し しゅ を  
受 之 神 成 主

なん ぢ の は ら に い れ し じゅん け つ な る ど う て い ぢ よ  
爾 腹 容 純 潔 童 貞 女

よ、 わ れ い ま う れ う る も の を す て ず し  
我 今 憂 棄

て、すみやかになだめて、きょうあく  
速 宥 凶 悪

しゃのこうてきおよびしんがいよりのがれしめた給  
者 抗 敵 及 侵害 脱 給

ま え。

【 聖入 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにししてふくたるじょうせいなるてんのちちの  
聖 福 常 生 天 父

せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ  
聖 光 榮 穩 光

ス スハリスト スよ、われらひのいりにいたりく暮  
我 等 日 入 至 暮

れのひかりをみて、かみちちとことせいしん神  
光 見 神 父 子 聖 神

をうたう。いのちをたもうかみのこ  
歌 生 命 賜 神 子

よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ  
爾 何 時 敬 虔 聲 歌

るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ  
故 世 界 爾 を 崇

ほむ。  
讚

【 第一の提綱 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん えいち つつし き  
謹みて聴くべし、衆人に平安、睿智、謹みて聴くべし。

誦經) プロキメン、第五の調、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に  
いた  
至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも  
主 爾 我等 保 我等 護  
りて、このよよりえいえんにい  
斯 世 永 遠 んに 至  
たらん。

誦經) しゅ われ すく たま けだしぎじん た  
主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも  
主 爾 我等 保 我等 護  
りて、このよよりえいえんにい  
斯 世 永 遠 んに 至  
たらん。

誦經) しゅ なんぢ われら たも われら まも  
主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、

このよよりえいえんにいたらん  
斯 世 永 遠 んに 至 たらん

司祭) えいち  
睿智、

誦經) <sup>そうせいき よみ</sup> 創世記の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

【 創世記 1章24節~2章3節 】

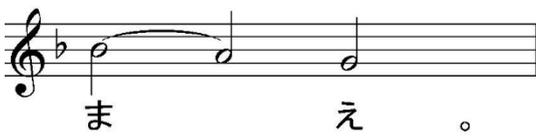
誦經) <sup>かみい</sup> 神曰えり、<sup>ち いきもの</sup> 地は生物を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて、<sup>かちく</sup> 家畜と、<sup>はうもの</sup> 昆蟲と、<sup>ち けもの</sup> 地の獸と<sup>そのるい</sup> を其類に<sup>したが</sup> 従いて  
<sup>さん</sup> 産すべし。<sup>すなわち</sup> 即、<sup>かな</sup> 斯く成れり。<sup>かみ</sup> 神は<sup>ち けもの</sup> 地の獸を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて、<sup>かちく</sup> 家畜を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて、<sup>ち</sup> 地  
<sup>もろもろ</sup> の諸の<sup>はうもの</sup> 昆蟲を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて造れり。<sup>つく</sup> 神之を<sup>かみこれ</sup> 觀て<sup>み よし</sup> 善とせり。<sup>かみい</sup> 神曰えり、<sup>ひと</sup> 人を<sup>われら</sup> 我等の<sup>ぞう</sup> 像と  
<sup>われら</sup> 我等の<sup>しょう</sup> 肖とに<sup>したが</sup> 従いて造るべし。<sup>つかさど</sup> 彼は<sup>うみ</sup> 海の<sup>うお</sup> 魚と、<sup>そら</sup> 天空の<sup>とり</sup> 鳥と、<sup>けもの</sup> 獸と、<sup>かちく</sup> 家畜と、<sup>ぜんち</sup> 全地と、<sup>ち</sup> 地  
<sup>は</sup> に<sup>ところ</sup> 匍う<sup>もろもろ</sup> 所の<sup>はうもの</sup> 諸の<sup>つかさど</sup> 昆蟲とを<sup>かみ</sup> 宰<sup>かみすなわちおのれ</sup> るべし。<sup>ぞう</sup> 神乃<sup>したが</sup> 己の<sup>ひと</sup> 像に<sup>つく</sup> 従いて<sup>かみ</sup> 人を<sup>ぞう</sup> 造り、<sup>かみ</sup> 神の<sup>ぞう</sup> 像  
<sup>したが</sup> に<sup>これ</sup> 従いて<sup>つく</sup> 之を<sup>これ</sup> 造れり。<sup>なんによ</sup> 之を<sup>つく</sup> 男女に<sup>かみ</sup> 造れり。<sup>かみかれら</sup> 神<sup>しゆく</sup> 彼等を<sup>い</sup> 祝して<sup>う</sup> 曰えり、<sup>ふ</sup> 生めよ、<sup>ち</sup> 殖えよ、<sup>ち</sup> 地に  
<sup>み</sup> 充てよ、<sup>これ</sup> 之を<sup>おさ</sup> 治めよ、<sup>またうみ</sup> 又<sup>うお</sup> 海の<sup>けもの</sup> 魚と、<sup>そら</sup> 獸と、<sup>とり</sup> 天空の<sup>もろもろ</sup> 鳥と、<sup>かちく</sup> 諸の<sup>ぜんち</sup> 家畜と、<sup>ち</sup> 全地と、<sup>ち</sup> 地に<sup>は</sup> 匍う  
<sup>ところ</sup> 所の<sup>もろもろ</sup> 諸の<sup>はうもの</sup> 昆蟲とを<sup>つかさど</sup> 宰<sup>かみ</sup> れ。<sup>かみまたい</sup> 神又曰えり。<sup>み</sup> 視よ、<sup>われなんぢら</sup> 我爾等に、<sup>ぜんち</sup> 全地の<sup>おもて</sup> 面に<sup>あ</sup> 在る<sup>たね</sup> 種を<sup>ま</sup> 蒔く  
<sup>ことごと</sup> 悉<sup>くさ</sup> くの<sup>およ</sup> 草、<sup>ま</sup> 及び、<sup>たね</sup> 蒔く<sup>いだ</sup> べき<sup>み</sup> 核を<sup>むす</sup> 懐く<sup>ところ</sup> 實を<sup>ことごと</sup> 結ぶ<sup>き</sup> 所の<sup>あた</sup> 悉<sup>こ</sup> くの<sup>なんぢら</sup> 樹を<sup>ら</sup> 與えたり。<sup>こ</sup> 此れ<sup>なんぢら</sup> 爾等の  
<sup>かて</sup> 糧と<sup>な</sup> 爲らん、<sup>またち</sup> 又<sup>すべ</sup> 地の<sup>けもの</sup> 凡ての<sup>そら</sup> 獸、<sup>すべ</sup> 天空の<sup>とり</sup> 凡ての<sup>およ</sup> 鳥、<sup>ち</sup> 及び<sup>は</sup> 地を<sup>ところ</sup> 匍う<sup>すべ</sup> 所の<sup>はうもの</sup> 凡ての<sup>およ</sup> 昆蟲、<sup>いのち</sup> 凡そ<sup>いのち</sup> 生命  
<sup>もの</sup> ある<sup>われしゆく</sup> 者には、<sup>すべ</sup> 我<sup>あお</sup> 食として<sup>くさ</sup> 凡ての<sup>あた</sup> 青き<sup>すなわち</sup> 草を<sup>かな</sup> 與えたり。<sup>かみ</sup> 即<sup>そのつく</sup> 斯く<sup>ことごと</sup> 成れり。<sup>ことごと</sup> 神は<sup>ことごと</sup> 其<sup>ことごと</sup> 造りし<sup>ことごと</sup> 悉<sup>ことごと</sup>  
<sup>もの</sup> くの<sup>み</sup> 物を<sup>はなはだ</sup> 觀て、<sup>よ</sup> 甚<sup>ゆう</sup> 善しと<sup>あさ</sup> せり。<sup>こ</sup> 夕あり<sup>こ</sup> 朝あり、<sup>だいろくじつ</sup> 是れ<sup>か</sup> 第六日<sup>てんち</sup> なり。<sup>およ</sup> 斯く<sup>そのことごと</sup> 天地<sup>ことごと</sup> 及び<sup>ことごと</sup> 其<sup>ことごと</sup> 悉<sup>ことごと</sup>  
<sup>そうしゆく</sup> の<sup>な</sup> 装飾<sup>かみ</sup> は<sup>だいろくじつ</sup> 成れり。<sup>そのつく</sup> 神は<sup>わざ</sup> 第六日<sup>お</sup> に<sup>だいしちじつ</sup> 其<sup>そのつく</sup> 造り<sup>ことごと</sup> たる<sup>わざ</sup> 工<sup>ことごと</sup> を<sup>わざ</sup> 竣<sup>ことごと</sup> え、<sup>ことごと</sup> 第七日<sup>わざ</sup> に<sup>ことごと</sup> 其<sup>ことごと</sup> 造り<sup>ことごと</sup> たる<sup>ことごと</sup> 悉<sup>ことごと</sup>  
<sup>やす</sup> くの<sup>かみ</sup> 工<sup>だいしちじつ</sup> より<sup>しゆく</sup> 息<sup>これ</sup> めり。<sup>せい</sup> 神は<sup>けだしこ</sup> 第七日<sup>ひ</sup> を<sup>おい</sup> 祝して、<sup>かみ</sup> 之を<sup>つく</sup> 聖<sup>そのことごと</sup> に<sup>そのことごと</sup> せり、<sup>そのことごと</sup> 蓋<sup>そのことごと</sup> 斯<sup>そのことごと</sup> の<sup>そのことごと</sup> 日<sup>そのことごと</sup> に<sup>そのことごと</sup> 於<sup>そのことごと</sup> て<sup>そのことごと</sup> 神<sup>そのことごと</sup> は<sup>そのことごと</sup> 造<sup>そのことごと</sup> り<sup>そのことごと</sup> たる<sup>そのことごと</sup> 其<sup>そのことごと</sup> 悉<sup>そのことごと</sup>  
<sup>わざ</sup> くの<sup>やす</sup> 工<sup>やす</sup> より<sup>やす</sup> 息<sup>やす</sup> めり。

【 第二の提綱 <sup>プロキメン</sup> 】

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>だいろく</sup> プロキメン、<sup>しらべ</sup> 第六の<sup>しゆく</sup> 調、<sup>かみ</sup> 主<sup>かえり</sup> 我<sup>われ</sup> が<sup>き</sup> 神<sup>たま</sup> よ、<sup>たま</sup> 顧<sup>たま</sup> みて<sup>たま</sup> 我<sup>たま</sup> に<sup>たま</sup> 聽<sup>たま</sup> き<sup>たま</sup> 給<sup>たま</sup> え、

しゆわが かみよ、かえりみて われに ききた  
主我 神 顧 我 聽 給



誦經) <sup>しゅ われ まつた わす</sup> 主よ、我を全<sup>く</sup>忘<sup>る</sup>ること <sup>いづれ とき いた</sup>何<sup>の</sup>時<sup>に</sup>至<sup>る</sup>か、 <sup>なんぢ おもて われ かく</sup>爾<sup>の</sup>面<sup>を</sup>我<sup>に</sup>隠<sup>す</sup>こと <sup>いづれ とき</sup>何<sup>の</sup>時<sup>に</sup>至<sup>る</sup>か、



誦經) <sup>しゅ わ かみ</sup> 主<sup>我</sup>が<sup>神</sup>よ、



【 祝福 】

司祭) <sup>えいち つつし た</sup> 睿智、 肅<sup>み</sup>て立<sup>て</sup>、 <sup>ひかり しゅうじん たら</sup>ハリストスの 光<sup>は</sup>衆<sup>人</sup>を照<sup>ら</sup>す。

誦經) <sup>しんげん よみ</sup> 箴言<sup>の</sup>讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹<sup>み</sup>て聽<sup>く</sup>べし、

【 箴言 2章1~22節 】

誦經) <sup>わ こ なんぢも わ ことば い わ いましめ おのれ うち おさ か なんぢ みみ ち</sup> 我<sup>が</sup>子<sup>よ</sup>、 爾<sup>若</sup>し我<sup>が</sup>言<sup>を</sup>納<sup>れ</sup>、 我<sup>が</sup>誠<sup>命</sup>を己<sup>の</sup>衷<sup>に</sup>藏<sup>め</sup>、 斯<sup>く</sup>して 爾<sup>の</sup>耳<sup>を</sup>智<sup>え</sup>  
<sup>かたが なんぢ こころ さとり む も ちしき よ さとり む こえ あ も ぎん</sup> 慧<sup>に</sup>傾<sup>け</sup>、 爾<sup>の</sup>心<sup>を</sup>聰<sup>明</sup>に<sup>向</sup>け、 若<sup>し</sup>知<sup>識</sup>を呼<sup>び</sup>、 聰<sup>明</sup>に<sup>向</sup>かいて 聲<sup>を</sup>揚<sup>げ</sup>、 若<sup>し</sup>銀<sup>の</sup>  
<sup>ごと これ もと たから ごと これ たづ すなわちなんぢしゅ おそ おそれ さと かみ し</sup> 如<sup>く</sup>之<sup>を</sup>求<sup>め</sup>、 寶<sup>の</sup>如<sup>く</sup>之<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>ば、 則 <sup>爾</sup> 主<sup>を</sup>畏<sup>る</sup>る 眞<sup>畏</sup>を曉<sup>り</sup>、 神<sup>を</sup>知<sup>る</sup>  
<sup>ちしき え けだししゅ ちえ あた ちしき さとり そのくち い かれ ぎじん ため すくい</sup> 知<sup>識</sup>を獲<sup>ん</sup>。 蓋 <sup>主</sup>は智<sup>慧</sup>を與<sup>え</sup>、 知<sup>識</sup>と聰<sup>明</sup>とは其<sup>口</sup>より出<sup>ず</sup>、 彼<sup>は</sup>義<sup>人</sup>の爲<sup>に</sup> 救<sup>は</sup>  
<sup>そな かれ なお ゆ もの ため たて かれ こうぎ みち たも そのせいしゃ みちすぢ まも</sup> 備<sup>う</sup>、 彼<sup>は</sup>直<sup>く</sup>行<sup>く</sup>者<sup>の</sup>爲<sup>に</sup> 盾<sup>な</sup>り、 彼<sup>は</sup>公<sup>義</sup>の途<sup>を</sup>保<sup>ち</sup>、 其<sup>聖</sup>者<sup>の</sup>諸<sup>途</sup>を 守<sup>る</sup>。  
<sup>か ごと なんぢ こうぎ こうはん せいちよく いつさい よ みち さと ちえなんぢ こころ</sup> 是<sup>く</sup>の如<sup>く</sup>して 爾<sup>は</sup>公<sup>義</sup>と公<sup>判</sup>と正<sup>直</sup>と一<sup>切</sup>の善<sup>き</sup>道<sup>と</sup>を曉<sup>らん</sup>。 智<sup>慧</sup> 爾<sup>の</sup>心<sup>に</sup>  
<sup>い ちしきなんぢ たましい たのし とき すなわちしりよ なんぢ まも さとり なんぢ たも</sup> 入<sup>り</sup>、 知<sup>識</sup> 爾<sup>の</sup>靈<sup>に</sup> 娛<sup>し</sup>からん時<sup>は</sup>、 則 <sup>爾</sup> 思<sup>慮</sup>は 爾<sup>を</sup>守<sup>り</sup>、 聰<sup>明</sup>は 爾<sup>を</sup>保<sup>つ</sup>  
<sup>こ なんぢ あ みち いつわり い ひと すく なお みち はな やみ みち ゆ</sup> たん、 是<sup>れ</sup> 爾<sup>を</sup>悪<sup>し</sup>き途<sup>より</sup>、 虚<sup>偽</sup>を言<sup>う</sup>人<sup>より</sup> 救<sup>い</sup>、 直<sup>き</sup>途<sup>を</sup>離<sup>れ</sup>て 幽<sup>暗</sup>の路<sup>を</sup>行<sup>く</sup>

もの あく おこな たの あくしゃ よこしま よろこ もの そのみち まが そのこみち まよ  
 者より、悪を行 うを樂しみ、悪者の邪 修を喜 ぶ者より、其途の曲り、其 徑に迷  
 もの すく ため なんぢ いんぷ ことば もつ へつら おんな そのわか とき きょうどう  
 う者より救わんが爲、爾を淫婦より、言を以て諂う 婦より、其少き時の教 導  
 しゃ す かみ やく わす もの すく ため けだしかれ いえ し ひ そのこみち  
 者を棄てて、神の約を忘れたる者より救わんが爲なり、蓋 彼の家は死に引き、其 徑  
 しぼうしゃ おもむ かれ い もの みなかえ またいのち みち のぼ ゆえ なんぢぜんんにん みち  
 は死亡者に 趣く、彼に入る者は皆 歸らず、亦生命の途に上らず。故に 爾 善人の途  
 ゆ ぎじん みちすぢ したが けだしぎじん ち お え むてん もの こ とどま しか  
 を行き、義人の諸 途に 循え、蓋 義人は地に居るを得、無玷の者は此れに 留まらん、然  
 れども悪人は地より 滅ぼされ、悖れる者は之より根絶されん。

司祭) なんぢ へいあん えいち ねが わ いのり こうろ かおり ごと なんぢ かんばせ まえ のぼ わ  
 爾に平安、睿智、願わくは我が 禱は香爐の香の如く爾が 顔の前に登り、我  
 て あ くれ まつり ごと い  
 が手を擧ぐるは暮の 祭の如く納れられん。

※ 願わくは我が禱は、、、へ